

回顧録

ごく私的な新聞学専攻・メディア学科の
メモワール山口功二[†]

1. 入学当時の新聞学専攻

1948年4月に新制大学の発足とともに厚生学科を母体に文学部社会科学新聞学専攻が創設された。戦前の軍国主義化を抑止できなかったのは、ジャーナリズムの貧困にあったという反省と民主主義教育の必要からから、新聞学研究が求められたのである。和田洋一、住谷申一両教授が創立スタッフとして就任し、新聞学専攻の創立とともに日本新聞学会の関西の拠点として日本の新聞学研究に大きな役割を果たした。

これが新聞学専攻の創立を説明する文言として語り継がれてきた。しかし、私が同志社大学新聞学専攻に入学したのは、1960年4月のことであったから、創立して12年後のことであった。新聞学専攻の第2世代であったといえるだろう。

私のふるさは和歌山県の南部。新宮市に近い港町の、国道42号線から十分程山に入った、山村の佇まいのある環境につつまれた村から新宮高校に進んだ。新宮高校は作家の佐藤春夫や中上健二を生んでいる。そういうことも影響して、今の自分からは想像できないが、作家志望であった。新宮という町は江戸時代、紀州藩江戸詰め家老の水野家の城下町であった。だから、高校の友達はそのほとんどが東京に出ている東京志向の町であった。私も高校三年の夏休みに東京に出て、駿台予備校の夏期講習を受けた。正真正銘の田舎の高校生が夏の東京で勉強するなんて生涯のミスマッチだった。東京では勉強はできないと悟るために東京で夏期講習を受けたようなものだった。そこで京都に行こうと考えた。それが同志社の新聞学専攻を受けることにした一番の動機である。

同志社大学社会科学新聞学専攻に合格して京都にやってきた。高校の二年先輩が社会学専攻にいたので、その先輩を頼って下宿を探してもらった。最初の下宿は烏丸北大路、当時は烏丸車庫とっていた近くにあった。四畳半で二食付き6,500円だった。当時は烏丸通りにも今出川通りにも市電が走っていた。烏丸車庫で乗車し、鞍馬口、烏丸

[†]1960～1967年在学，1972～2012年在職

中学前、上立売、烏丸今出川まで。市電の切符は往復では25円、片道では15円だった。生協食堂の素うどんが15円。家からの仕送りは、1万2千円。後に千円増やしてもらった。平均的な仕送り金額であった。

さて、宿が決まり、いよいよ同志社大学の学生生活が始まることになった。入学式については、女子大学の栄光館で執り行われたはずであるが、具体的には記憶がない。式の後、新聞学専攻生だけの集りがあり、教員の紹介があった。和田洋一、住谷申一両教授、山本明、八田恭太郎専任講師、辻村明助手が紹介された。辻村さんは大学院経済学研究科の出身で後に産業関係学専攻の設立とともにそちらに移籍した。スタッフのなかのもっとも長老格の教授は和田洋一さんと住谷申一さんは、やや補佐的な位置にいたという印象であった。私たちは以後和田さん、住谷さんと呼ぶようになった。直接対するときは、和田先生、住谷先生と呼んだが、学生の間で話をするときは、和田さん、住谷さんと呼びなして先生と敬称をつけることがなかった。それが新聞学専攻の伝統というか習慣であった。

(こうした草創期の新聞学専攻については、同志社大学メディア・コミュニケーション研究センターが発行した『同志社メディア・コミュニケーション研究』の2006年3月号が詳しい。「草創期の『新聞学専攻』前田裕吾さんに聞く」というタイトルで、私と渡辺武達が1953年度生で現在『労働情報』の代表である前田裕吾さんにインタビューした鼎談記事が掲載されている)

山本明さんは私たちより9歳も年上であったが、同じ同志社の新聞学専攻の出身者であった気楽さがあったためか、われわれは「メイさん」と呼んでいた。山本明さんは学生としては、第1世代に属していたといえるだろう。私は、山本明さんの学生であったわけだから第2世代に属する学生であるといえるだろう。そういう意味では、現在メディア学科の准教授である河崎吉紀さんも新聞学の出身者であるから、何世代目かに属する学生であるといえよう。

スタッフには、小林栄一さんという京大卒で、共同通信の記者であった助教授がいたはずだが、病気で欠席しており、お目にかかる機会がないままであった。後に文学部発行の紀要『人文学』に書かれたウィリアム・ランドルフ・ハースト論を読む機会があった。私はアメリカ移民を多く生んだ地方の出身であり、祖父はカルフォルニアに長く住んでいた。そのような経緯の中で、移民仲間との会話に「あのハーストが」と挟むほどであったから、排日の元凶であったことを知っていた。話が聞けないままに逝去されたことを惜しいと思った。

入学式の後で学生証が配られ、私は1960年度、学籍番号が266番であることを知った。高校までは元号を使用し、昭和35年入学と考えていたのだが、キリスト教主義の大学は西暦を使用するのだと納得した。同志社は偶像否定の教義に則っていたので、十

字架も新島襄の肖像も銅像も見かけることはなかったが、新島襄の言葉はよく引かれたものである。入学、卒業のあいさつを通して、新島襄の言葉、聖書の語句はいつの間にか記憶のなかに刻み込まれるほど聞かされることになった。

新聞学専攻の1960年度の学生は70人で、そのうち女子学生は7名でちょうど10%。59年度では学生数96人中9名だったが、女子学生の数は徐々に増加していった。61年度の学生数は100名と現在とは変わらないほどのなか、女子学生数は10名。62年度生では109人に対して女子学生は15人ほどとさほどの変化はない。しかし、20年後の1980年度になると、学生数85人に対して女子学生は25とその割合は30%に増加している。81年度では87人中、26人。82年度では83人で26人と確実にメディアへの女性の進出が顕著になってきたことを反映している。ちなみに2005年度、社会学部発足の時に発行されたリーフレットでは、メディア学科の男女比は、男49%、女51%で、男女比は逆転している。

女子学生が少ないということが原因ではないが、新聞学専攻だけではなく、当時の学生のファッションは、まだ学生服姿が主流であった。同志社だけではなく、京都の大学は1年生、2年生という呼び方をせずに1回生、2回生と呼んでいたが、私も1回生の頃は高校時代の学生服に同志社のマークのはいった銅色のボタンを付け替えて着用していた。独特の角度を持った同志社の角帽をかぶっている学生もいた。しかし、60年代に入って急速に学生服は力を失い、私も2年目からジャケット姿に変わった。

大学生活において最近ではアルバイトが大きな割合を占めているが、60年代の学生でアルバイトの割合はさほど大きくはなかった。家庭教師が典型的な学生のバイトであった。私は学部時代に時代祭のアルバイトをしたことがあるが、それは当時所属していた体育会「航空部」の活動資金を捻出するためのバイトで、私自身の収入にはならないものだった。しかし、新聞学専攻生のなかには様々なバイトで生活と授業料をまかっていた学生もいた。

2. 60年代の学生生活

当時はまだ「部活」という言葉はなかったが、体育会か学友団傘下のクラブ、自由参加の部外連と呼ばれるクラブに所属している学生が多かった。私の入っていた「航空部」には、安本雅一君が新聞学専攻の同級生でいた。彼はあまり熱心な部員ではなく、むしろ学生運動の活動に熱心で、3回生の時には学友会常任委員会の書記長を務めている。彼に注目したのは、学生大会の時、体育会の方針に逆らって拳手を拒んだからだ。しかし、航空部の方は、学生大会の後つるし上げまでいかないが、糾問があり、私も安本もそれが原因でやめることになった。彼は卒業後、組合運動に参加し、折に触れ、つ

きあいが続いている。

2 回生になって、戯曲を書きたくなり、舞台芸術の具体的な知識を知りたくなった。下宿の隣室の紙谷勝弘さんという英文科の一年年上の学生に相談した。部外連の「第三劇場」というスタニスラフスキー・システムと呼ばれる社会主義リアリズムを標榜する劇団を紹介された。「第三劇場」を紹介してくれたこの紙谷さんとは、大学をどう利用するかを教えてくれた頼もしい先達だった。彼によって教養というものが何であるのかを知ったように思う。マックス・ウェーバーの「職業としての学問」を音読しながら解説してくれた。それが大学への第一歩だった。

さて、「第三劇場」に入部して最初にかかわったのがアーサー・ミラーの「橋からの眺め」であった。京都会館第二ホールで上演されたのだが、それが私の演劇との出会いとなった。この芝居では私はほんの端役を演じたのだが、舞台にのったのは、これが最初で最後だ。その後、裏方で照明をやったり、演出助手を受け持ったりして、28歳で別役実の「象」を演出して、演劇の世界から足を洗った。二足のわらじには決着をつける必要を感じたからだ。

演劇部での訓練は、コミュニケーション論を具体的に考える上で非常に役立った。当時私は乱読の傾向があり、一日に本を一冊読み上げるなどと、課題として読書をしていたのだが、演劇は毎日レパトリーを繰り返し読み込み、演技するということを繰り返す作業を重ねる必要がある。このプロセスを通して、一つの台詞が他の台詞とどのように関連するのか、言語コミュニケーションと非言語コミュニケーションが演技の根幹をなして、表情としての表現、身体運動としての表現、キネシクス（動作学）などコミュニケーションの統合的な研究を考えるきっかけとなった。最初は、戯曲研究のために入った演劇集団であったが、コミュニケーション研究の源になったのである。当時同志社の演劇活動は、演劇研究会（劇研）、同志社小劇場、民話劇研究会、第三劇場などがあり、演劇活動は活発であった。第三劇場では、もう一公演、サルトルの「墓場なき死者」の演出助手についた。このときの舞台監督は新聞学専攻の学生の青木陽子さんで、その後鶴見俊輔ゼミでクラスメイトとなる。また、この舞台で演出陣と先輩との間でトラブルがあり、「創作劇術劇場」（創芸）をつくって、離れた。となりの部室に「創研」という似たような名前の劇団があり、そのメンバーに柴山哲也さんがいた。その彼とは大学院修士課程新聞学専攻で再会することになった。彼は朝日新聞に入り、その後、京都女子大の教授になった。

3. 60年代の大学のシステム

入学式やその後の入学説明会などはほとんど記憶に残っていない。記憶に刻みつけら

れたのは、科目登録の煩雑さについてである。コンピュータはまだない。時間割を自分の計画通りに組み立てるためには多くの窓口をたたく必要があった。あまりの煩雑さに「神は愛なり」とわめきだした学生がいたと噂されるほどであった。

60年度生の登録制限は52単位であったが、私は51単位の登録しかできなかった。卒業に必要な総単位数は136単位であったから、1年で50単位とれば余裕を持って卒業できるはずであった。しかし、4年後の卒業時には70名中わずか50数名に減少していた。このような現象は現在でも継承されている。

当時のカリキュラムは大学紛争前のシステムで、1,2回生で教養科目を履修し、専門科目は主に3,4回生で履修するというものだった。それでも専門科目を1回生から履修することができた。1年目の科目中、新聞学関係の科目は、住谷申一さんの担当する「新聞発達史」だけであった。1年目で登録できる専門科目は、他に「社会科学概論」「社会思想史」などがあった。新聞学専攻関係の科目は当時さほど多くはなかった。そのために新聞学専攻生は、自動的に社会学科の他専攻科目を幅広く履修することになった。

「新聞発達史」を担当した住谷申一さんは、学生から非常に信頼されていて、学生の人気の点でも最も高かった教員であった。私は教員になってから「ジャーナリズム史」という「新聞発達史」の後継の科目を講義することになるのだが、「歴史」があまり好きではなく、熱心に学んだ記憶はない。当時の教員には学生におもねるという雰囲気はあまりなかった。「新聞発達史」については小新聞と大新聞の話だけが耳に残っている。そういうわけで、私は社会福祉学専攻の嶋田啓一郎さんが担当する「社会思想史」などのほうが面白く、熱心にノートをとったが、学年末試験で試験時間を一時間間違い、翌年再履修することになってしまった。「社会科学概論」は新聞学専攻の必修科目であったが、経済学部の住谷悦治さんが担当していた。住谷悦治は住谷申一さんの兄で、社会福祉学専攻の助手であった住谷馨さんの父という間柄であった。和田洋一さんの父は、和田琳熊で、同志社大学学長をつとめたことがある。

新聞学専攻が提供していた科目は、山本明さんの担当する「世論・宣伝」、和田さんの担当する「新聞学原論」、また住谷申一さんの「新聞経営論」があった。ほかに「新聞法制・倫理」では、メディアの社会的責任理論を学んだ。この科目は、「放送概論」「広告論」と同じように嘱託講師が担当していた。

和田洋一さんの講義はやや吃音があり、講義を始めるときに左右のシャツをたくし上げる儀式がある。聞いている学生は息を詰めてなにを語り始めるか注視するようなところがあった。スピードはゆったりしていたので、私は和田さんの講義の内容はよく覚えている。特に最初の講義で新聞学の学問的な脆弱性に触れて、ドイツでは新聞学という学問（*Zeitungswissenschaft*）が成立するならば、「ニワトリ学」も成立はずだと言われ

たという話など、後年同じドイツ学者の佐藤卓己さんから聞かされて鮮やかに思い出した。ちなみに、鶴見俊輔さんから新聞学は、一種の擬科学（pseudo-science）だという説明を受けた。私も新聞学は根幹的な科学というものではなく、一種の応用的な研究であると位置づけている。

八田さんの「英書購読」を3年次に受講したが、後年のくだけた話しぶりとは違い、時間を惜しむような講義ぶりだ、非常に難解であった。これはテキストの選定から当然考えられることでもあった。テキストは新聞学とは直接関係がなさそうなカール・R・ポッパーの『開かれた社会とその敵』（Karl Popper, *The Open Society and Its Enemy*）であった。二分冊の注釈が大半の分厚いテキストだった。八田さんは社会学の助手から移籍してきた教員で、学問領域にこだわりが全くなかった。新聞とかジャーナリズムとかいう用語は何もなかった。そのこだわりのなさは私も共感をおぼえた。新聞学の必修科目はそのほかに「社会心理学」などがあったが、それは社会学専攻の科目であった。振り返ってみると、新聞学専攻科目は多くはなく、むしろ少ないと考えられるが、これはある意味でプラスに働いた面がある。メディアは、広範な領域の媒体として働く。そのためにメディア研究だけで完結する学問ではない。新聞学専攻は厚生学科から派生してきたことの意味がよく分かる。厚生を広辞苑で調べてみると、「書経」に起源をもち、「人民の生活を豊かにすること」「健康を維持また増進して、生活を豊かにすること」とある。私のゼミだけかも知れないが、新聞に就職を決めた卒業生は社会問題をテーマにすることが多い。社会学専攻、社会福祉学専攻の科目を履修することで教養の幅ができるという効果があったのであろう。

4. 60年安保の波の中で

入学当時の混乱が収まると、大学は60年安保の渦に巻き込まれる。京都の大学立地から同志社大学がデモ隊の行進の起点になり、同志社大学のデモは神学部から、文、法、経とそれぞれ一隊が組めるほどの参加者があった。京都府学連のデモ隊は明徳館前で集会を終え、その後正門から今出川通りに出て、東に向かう。寺町通りの交差点に突き当たり、後ろをふり返っても最後尾が確認できないほどの長蛇の列となっている。デモ隊は河原町通りにでると、腕を組む通常の隊列から手をつなぎながら通りいっばいに広がるフランス式隊列となり、電車は、もちろん車も通行できない状態で河原町四条まで直行し、そこから東に折れ、祇園まで向かうというコースをとった。

しかし、歴史的な反対運動といわれた闘争も6月17日東京の新聞七紙が共同でデモ隊の暴力を批判する七社声明を出し、岸内閣が退陣し、池田勇人内閣が成立すると、反対運動は急速に衰えた。われわれ学生は、それ以降、「安保以来の挫折」という自己憐

憫的な流行言葉を唱えて政治的な無気力に陥っていくことになる。

同志社大学の新聞学専攻は、和田洋一、住谷申一両教授を両翼としてもうすぐ30歳になろうかという山本明さんが、次世代の軸となった。日米安保条約の成立に抗議し、東京工業大学を辞任した鶴見俊輔さんが新聞学専攻の教授に就任したことがきっかけとなった。前田裕吾さんによれば、鶴見さんを同志社に招聘したのは住谷申一さんであったという。住谷申一さんは山本明さんを新聞史の研究者として期待していたということであったが、61年に鶴見俊輔さんが教授として就任すると、山本さんの仕事は新聞史研究から離れて、京都大学人文研究所の大衆文化研究、現代文化研究の流れに近づいていった。何れにしても山本さんは写真や漫画、流行歌、広告といった分野や、また戦時ビラやカストリ雑誌などの研究で業績を残すことになった。残念なことに50歳代前半から病を得て、晩年、十分に力を発揮することができなかった。

1960年12月の社会学部会議で「社会学部設置調査委員会」の設置が決定され、和田洋一、青井厚、嶋田啓一郎、橋本真、大塚達雄が委員として選出された。そして山本明が書記をつとめることとなった。

「取扱注意」と肩書きされた「社会学部設置調査委員会報告」が62年7月16日付けで発行されているが、この青焼きの報告書は山本明さんの作成したものである。報告書によれば、1960年12月28日に第1回会議を開き、1962年7月11日までに9回の会議を開いている。この報告書は9回の会議の総括といってよい。そして興味深いことにここで提案されている社会学部案とコース成案は、現在の社会学部と考え方としては非常に似ていることである。特に社会学部コース制案は、相似形といってよいものである。60年の段階では、産業関係は専攻としてはまだ設置されていなかったが、62年案では社会学コース、社会福祉コース、新聞学コース、産業関係コースと並んでXコース、Yコースなどのヴァリエーションが想定されている。現在の学科でいえば、Xコースが「教育文化学科」に当たる。新聞学専攻では、この報告書を受けて、討議資料No.1を63年6月25日、No.2を26日に発行している。作成者は山本明である。No.1は、新聞学の現況分析的な内容であるが、タイトルにあるように「新聞学専攻の将来－社会学部における新聞学科確立のために」は、新聞学専攻の未来像を提起している。

新聞学は、偽科学であるという議論の根拠として、メディア・ジェネレーションの変化による議論の軸の変化が著しいというところにある。すなわち、メディアの変遷によって議論がうつろうという性格をもっているのである。60年度生であった私たちですら新聞学を新聞だけの研究とは思っていなかった。私のメディア体験でも、ラジオはすでに重要なメディアであり、テレビは1953年から放送を開始していた。60年度生にとってテレビの出現は非常に重要なメディア革命であった。関西の大学における新聞学スタッフにも大きな波が押し寄せていた。1964年に同志社大学は、朝日放送の調査部に

いた北村日出夫をスタッフに迎え、関西学院大学社会学部は津金澤聡廣を毎日放送から迎えている。山本さんは、大学の中で新聞学研究者として育った人であり、メディア現場から育った人ではない。そういう環境からのたたき台としての提言は、社会学部設置案に対する新聞学科の方向を「いわゆる新聞（Newspaper）だけに限定しないで、広く科学としてのコミュニケーション、マス・コミュニケーションを対象とする」という提言に向かわせた。山本は、学科の名称は「新聞学」と冠したほうがよいと書いている。他に広報、広報社会学、応用社会学、新聞・放送、マス・コミュニケーションなどが考えられるが、当面は「新聞学」という名称でその内容を変えてゆく努力をしたいという。この提言は、私が大学院生であったときに学生間で議論になった問題でもあった。私たち学生は、教員の間で「新聞学」とは何かという議論があったとは知らなかった。大学院で支配的であった「新聞学」理解は、中国語での「新聞」が意味する「ニュース」に基づき、「ニュース学」としてとらえるのがよいというものであった。私は新聞学を「現代文化研究」だと考えていたから、その議論に同感であった。わたしたちが大学院新聞学研究会で『新聞学』というタイトルの研究誌を1967年3月に創刊したとき、サブタイトルに「文化とコミュニケーション」とつけたのは、そうした議論が背景にある。

山本さんは、新聞学の理念の項目ではっきりと「端的に言えばコミュニケーション、マス・コミュニケーションの理論と技術をとおして、現代と主体的に対応、対決する『新聞学』を追求する」と述べている。この「新聞学」と「マス・コミュニケーション」の方向性の論議は新聞学専攻内では、根深い認識論的な議論となった。この後、正確な年次は定かではないが、山本さんが残した「新聞学専攻討議資料」には、再度「新聞学専攻は、中身としてはマス・コミュニケーション専攻とする」と書かれており、これについて「和田・住谷氏の態度は不明確」と記されている。

こうした議論は、同志社大学の新聞学専攻だけではなく、学界全体に広がっていた情勢でもあった。後年、「日本新聞学会」は、その名称を「マス・コミュニケーション学会」と改称することになるのだが、この流れはメディア史的な転回が新聞メディアからテレビに移ってきた現実を物語っている。しかし、同志社大学の新聞学専攻が必ずしも整合的なマス・コミュニケーション研究の場所になったかという点、そうではない。討議資料には、新聞学科目の属人主義を廃するという文言はあったが、現実には教員構成の問題があり、科目をマス・コミュニケーションの研究のために整理するとしてもそれらの科目を誰が講義するかといえば、現有のスタッフによらざるを得ないわけであり、科目の属人主義を廃するわけにはいかないという現実があった。とすると、和田、住谷の創設メンバーの意向を無視するわけにはいなくなる。すっかり新体制にするためにはアンシャン・レジームをどのように解体するのかという問題をクリアしなければなら

なかった。

5. 60年代の新聞学専攻の講義科目と内容について

鶴見俊輔さんが同志社に来るということを教えてくれたのも、私の個人的なチューター役の紙谷勝弘さんだった。面白そうだから是非彼のクラスをとってみたいというアドバイスをくれた。そこで61年の4月に鶴見さんの担当する「比較新聞論」と「英書講読」を登録した。「比較新聞論」での第一印象は、教壇を熊のように歩きながら話をする目に強い光のある風貌であった。後ほど本人から学生たちに、当時自分は鬱病からの回復期にあったと話した。「英書講読」ではデーヴィッド・リースマン (David Riesman) の『孤独な群衆』(The Lonely Crowd) を読んだ。というより読んでもらった。プロの本の読み方を教わったような、目を洗われるような鮮やかさに感心した。3回生、4回生ゼミも彼のクラスをとり、その間、R・K・マートンの『社会理論と社会構造』やライト・ミルズの『社会学的想像力』などを読んだ。そのほかにも特に記号論、意味論が新聞学の研究にとって重要であると『意味の意味』やウィリアム・エンブソンの『曖昧さの七つの型』などを紹介された。

現在、演習(ゼミ)は3,4年次と2年間の履修が常態化しているが、60年代の新聞学専攻では1年半の履修であった。半年という中途半端な履修期間は就職活動が長期にわたるといった現実があったからだ。すなわち、四年次の一年では実質的には半年の履修でしかないという現実があったからである。私は鶴見俊輔ゼミを選択した。ゼミは、当時教授だけが担当できた。メンバーは19名だった。ゼミ・メンバーのコアとなったのは、「新聞学研究会」の活動的な人たちだった。私はどちらかというといつものように周辺的な位置にいたように思う。しかし、卒業間近にゼミの雑誌『ケルン』の編集に携わったのは、青木陽子さんは別として、富樫隆輔、田中啓助と私という、どちらかというゼミの周辺的な存在の面々であった。

鶴見ゼミの卒業論文は、およそ新聞学専攻的ではなかった。青木陽子「民主的医療を求めて－全国医連一〇年史から」、樋口寛美「いなか」、平尾和「合唱団むぎ運営委員会への要請」、堀田昌幸「同志社大学野球部を通しての大学と野球」、岸野純子「現代における大学の意味と大学生の使命」、木村聖哉「戦争責任と恥の問題」、中西勝治「団地における人間関係」、苗村禎子「私の宮本百合子論－「二つの庭」と「葎の影」より」、丹羽康夫「安保闘争におけるお守り言葉－京都新聞五・一五～六・一九を通して」、大宮正勲「県人会の可能性について－同志社県人会を例に」、芝明子「鴨東寮より見た寮生活のあり方」、柴地則之「ユートピアの原思想－山岸巳代蔵を中心として」、志賀喜彦「我国の観光事業の分析と将来の展望」、田中啓助「松本清張論」、富樫隆輔「私の同世

代観」, 和田昌子「現代っ子の課題－行動法則を通して」, 中歳一「貸本屋の社会的機能性に関する一考察」, 湯浅道子「大学生の興味と関心」, それに私「意見の源泉－伝統的共同体の記述」というのがゼミ生の卒業論文タイトルだった。

卒業論文ではメディア関係の研究が少なかったが, 就職先は意外にメディア関係が多く, 「毎日放送映画」「大阪グラビア印刷」「大阪テレビフィルム」「電通映画社」「日本放送協会」「広告代理店大広」など就職者の3割以上がメディア関係であった。しかし, メディア界に就職した卒業生はほとんど途中で転職している。

鶴見さんの関心を引いたのは, 中歳一君の貸本屋の研究論文であったようだ。1965年に編集された筑摩書房刊の『ジャーナリズムの思想』の中で中君の論文が紹介されている。鶴見さんの度量のひろさは, 卒業論文というアマチュア作品であれ, 評価できるものであればそれを正当に評価するということにある。

私がクラスで面白い発表をすると注目していたのは, 木村聖哉と柴地則之の両君であった。クラスでコミュニケーション論が中心的な話題になっていたのは, 安保闘争の思いが尾を引いていたのだということができる。簡単に言ってしまうと, 安保の幕引きをしたのは, 結局在京の新聞七社のデモ批判であった。マス・メディアに対する幻滅感がわれわれの中に根強く残った。そこで, 安保以来の挫折といわれた挫折世代にとって新たな起点となったのは, ややユートピア的なコミュニケーションを目指すことであった。ウィリアム・モリスやソーローの「森の生活」, 武者小路実篤の「新しい村」などが話題になったが, その中でも柴地や木村, 大宮, 樋口たちは「山岸会」に関心をもち, テンポラリーであったが, それに参加し, それをよりどころに活動を展開しようとした。私の卒論テーマも同様の動機を持っていたが, 私は山岸会の運動に参加したことはなかった。

新聞学専攻のゼミでありながら, メディアの問題に取り組んだ卒論がないという理由が明らかにされる。柴地則之は, 大学を卒業後, 奈良市の大倭教に入り, それを拠点に大倭殖産, 大倭病院などをつくった。木村聖哉は, 「大阪勤労者音楽協議会」(労音)に入り, その後, 「話の特集」の編集に携わり, 個人雑誌『冷蔵庫』を発行し続けた。

6. 文学研究科新聞学専攻の第一期生時代

鶴見さんのクラスをとったことで, 私はもっと勉強したいという気持ちが強くなった。そんな折に鶴見さんから新聞学専攻に大学院修士課程ができるという話を聞かされた。私は新聞学の学生だったが, あまり情報通というわけではなかった。前年, 東京大学新聞研究所の教授であり, 所長であった城戸又一さんが新聞学の教授として同志社にこられたのだが, あまり関心を払わなかった。よく考えれば大学院を設置するための要員として迎えられたのだらうということが分かったはずである。一学年下の門奈直樹君

が城戸又一ゼミの一期生となった。門奈君はその後大学院に進学し、新居浜にあった桃山学院短期大学から立教大学に移り、教授をつとめた。

4回生の春のことだった。早速、鶴見さんに進学したいというと、それでは和田洋一さんに会ってみなさいと指示された。和田さんにあつて、大学院に進学したいというと、非常に喜んで、是非受験してくださいと進められ、それで決心は固まったが、夏休みから京都に帰って、できあがった試験要項を見て、青くなった。試験科目に第二外国語があったからだ。私の第二外国語はドイツ語だったが、2回生の時に終了して以来一度もドイツ語に接することはなかった。焦ってドイツ語の勉強を始めたが、試験には間に合いそうにない。その後、不本意な就職活動をしてある会社に内定はもらったが、大学院の試験は、3月にある。結局ダメ元と心を固めて受験したが、受験するといっていた仲間はいろいろな事情で受験せず、3名だけが受けた。合格したのは、社会学専攻からきた藤沢高治君と私の二人だった。藤沢君は在学中から離島のコミュニケーション・ネットワークについて研究しており、離島のフィールドワークを続けていた。彼のトカラ列島の研究は、新聞学会で発表され、同志社大学大学院新聞学専攻生の中で最初の学会発表を担うことになった。彼の研究対象は、モルジブ諸島や沖縄に及んだ。彼の関心であった離島研究や沖縄への関心は、後に続く大学院生に大きな刺激となった。彼は内に籠りがちな私にとって刺激的な仲間だった。彼は、その後、聖母女学院短大の教員となった。

ちなみに私の1年上の学年からは、成安女子短大教授の有馬忠広さん、中央大学教授となった塚本三夫さん、それにノンフィクション作家保阪正康さんがいる。それに鶴見ゼミ出身で『思想の科学』編集者となった那須正尚さんなどがある。

さて、新聞学専攻のスタッフとしては、1964年に前述の北村日出夫さんが、専任講師として、学部の英書やマス・コミュニケーション調査法を担当することになったが、当時の大学院の担当は、教授以外は担当せず、「マス・コミュニケーション論」を鶴見俊輔さん、「新聞発達史」を城戸又一さん、「現代新聞論」を和田洋一さんが担当した。そして立命館大学教授だった前芝確三さんが講師として「比較新聞論」を受けもった。前芝さんは、モスクワ特派員としての経験からの話が多くあつたが、われわれの知識が貧しく生かし切れなかった憾みがある。

手元に1966(昭和41)年度の「大学院履修要項」があるのだが、なぜか昭和41年度と書かれており、西暦表記ではない。それによれば、新聞学専攻は文学研究科で最新の専攻であり、入学定員5名総定員10名の最小の専攻であった。授業料は年間23,000円だった。

60年代の大学院事情では、修士課程を2年で終了するのが当たり前というのではなく、2年以上、裏表在籍したりする学生がいた。私は、3年、藤沢君は2年半在籍した。こ

の習慣は、次第に薄れ、大学院が博士課程前期、後期課程と制度が変わってから修士は2年ですませるという傾向が強くなった。同志社大学の大学院は専攻間の交流があり、学部の流れから社会福祉学専攻の学生とは講義やそれ以外でも交流があった。私は法学研究科の田端忍さんの講義を聴講にいったこともある。交流といえば、大学院時代に東京大学新聞研究所の大学院学生との交流会を共催で開いた。その時、東大大学院の世話人をつとめてくれたのは、まだ紅顔の面影を残していた田中義久さんであった。彼は法政大学の教授になり、後年新聞学会の会長をつとめた。そして同志社大学から東大大学院に入学していた塚本三夫さんも出席していただいた。

すでにのべたことだが、1967年3月に『新聞学』を発行した。これは、編集委員長は井上文彦君、印刷や会計的な作業を担当してくれたのは、竹内和利君だった。竹内君は福祉関係の仕事を経て、ノートルダム女子大の教授になった。制作費用については和田洋一さんが費用を個人的に受け持ってくれた。これは、後代に人に知っておいていただきたい事柄の一つである。和田さんは、新聞学専攻の創設者であり、大学院の創設にもこころを尽くした人であった。『新聞学』は、全国紙にもその創刊が報じられ、そのためか多くの機関から送付の要請があった。

7. 大学院は出たけれど…そして同志社に戻る

私は1967年3月に修士課程を修了したが、その後の履歴が順調であったわけではない。第1期生としてのアイスブレイカーの役割を担うことになった。鶴見さんから松蔭女子大学の片桐ユズルさんを紹介され、68年4月から非常勤講師として新聞学を担当することになった。同志社大学とは、この時点から少し関係が希薄になったので、1972年4月に専任講師として復帰するまで新聞学専攻の事情については詳しい事情は分からなくなる。どこの大学でも同様の事情を持つことになるのだが、その翌年あたりから大学紛争の激化の時代に入り、大学は混乱の中に振り回されることになる。

1971年に同志社大学は学生に占拠されていた校舎を開放するために機動隊の導入を決め、鶴見俊輔さんはその導入に抗議し、同志社大学を退職した。鶴見さんにとって同志社大学が最も長い教員生活であり、その後大学で教えるということはなかった。私はその後任として同志社大学に戻るようになった。

学生紛争は、まだ終結したわけではなかった。しかし、1972年4月に新聞学専攻の専任講師として戻ってみると、紛争がカリキュラムに大きく影響を与えていた。その一つは、山本明さんが描いていた一年次から四年次まで小クラスによる演習クラスの導入が実現していたことである。1年次に「文章論」という形で20名程度の小クラスが4、5クラス設定されていた。また、クラス名は講義内容がすぐに分かるように改訂され

た。比較新聞論が、「外国新聞論」に、新聞発達史が「ジャーナリズム史」になった。大きな変革では、必修科目の多くが必修選択科目と変更になったことであった。専攻が必ず学んでほしい科目群の中から学生が自ら必要な科目を選択することができるようになった。そのために取材論、編集論とそれに伴う実習は、「文章論」という小クラス演習科目に変わり、演習（ゼミ）などに並んで必修科目となった。学生が自分で学びたい領域が大幅に増えていた。しかし、学生の雰囲気は殺伐としており、私が就任した72年春の入学式後の教室で私は登録説明を仕切ろうとして学友会のメンバーに危うくピラ束で殴られそうになった。耳のそばをブーンとかすめた紙束の音を覚えている。和田さんは、学生の手荒い歓迎にあった私を笑いを含んだ目で見ているのを思い出す。その年は、入学式が無事に終わったが、74年の卒業式は挙行できなかった。

私が最初に受け持ったのは、「ジャーナリズム史」、「英書講読」、「文章論」、「3年演習」の四科目だった。私は歴史研究が主な研究領域というのではなかったが、大学院を修了した67年春、松山商科大学で開かれた日本新聞学会で「明治後期における地方言論人の役割」というタイトルで個人発表したことから歴史ができるだろうということで「ジャーナリズム史」を担当することとなった。そして、翌年から「4年演習」が一コマ増えた。この中でも「文章論」と「3年演習」の科目は小クラスで同志社大学新聞学専攻の学生の質の高さを知ることになった。3年演習は、サブタイトルとして「ジャーナリスト研究」というものであったが、卒業論文は期待以上のできであった。そのタイトルと筆者を紹介すると、「大熊信行とその転向」（恒川節子）、「八木秋子」（鷺巣典代）、「辻潤」（青山正孝）、「大宅壮一」（仲井英博）、「後藤是山－地方紙記者と閑文字ジャーナリズム」（矢吹忠比古）、「花森安治論」（青木隆直）、「室伏高信論」（寺西一雄）、「ジャーナリスト清沢洌」（増金潔）などである。いずれも優れた論文揃いで、鷺巣さん論文の一部は活字になった。その時代の就職が容易というわけではなかったが、通信社では共同通信、時事通信社、新聞では北海道新聞、山陽新聞、それにフジテレビなど、10名ほどのゼミの半数がメディアに決まり、他のメンバーもそれぞれ、望ましい就職先を決めた。この中で新聞の論説委員になったのが2名、テレビのスポーツ局長になったのが1人いる。変わり種はというと語弊があるが、通信社に就職したのだが、その仕事が自分に合わないことを知って、退社し、神学部に入り直し、牧師になった例がある。同志社大学の新聞学専攻の出身者のなかで社会的に目立った活動をした人材は、私が面識のある初期の卒業生の中では2005年に株式会社オンワード樫山の代表取締役社長をつとめた76年度卒の上村茂君や、NHKの朝ドラ「ええにょぼ」や、「相棒」などの脚本を書いた77年卒業の東妙子さん、近くでは、2010年に「性分化疾患」についての記事で「早稲田大学ジャーナリズム大賞」「ファイザー医学記事賞」を受賞した毎日新聞記者、91年卒の丹野恒一君がいる。

8. 新学部構想について

私が72年に新聞学スタッフに参加し、その翌年、毎日新聞の論説委員だった岡満男さんが教授で京都大学人文科学研究所の助手だった竹内成明さんが助教授で参加することになった。この人件は私が入る前に決定済みであり、私はその選定に参加していない。岡さんは初め「新聞学原論」を、後に「ジャーナリズム史」を担当した。竹内成明さんは、私より八歳年長であったが、何かにつけ気楽に相談できる存在であった。

私が社会学科のスタッフに参加してからも、社会学科という器は社会的な要請の中でもう一回り大きくしなければならないという動きが特に社会福祉学専攻や産業関係学、それに体育関係の教員の中から起こった。1988年3月16日の臨時学科会議において、88年4月から新設学部の構想を具体化するための「新学部作業委員会」が設置された。基本構想は二学科制で、社会福祉学専攻と健康・スポーツ科学専攻を具体化するための小委員会が設置されることになった。委員は岡本、黒木、三塚、香川、石田、倉敷の七名で、これには社会学専攻と新聞学専攻の教員は参加していない。

この年代の新聞学専攻のリーダーシップを担っていたのは、北村日出夫さんと竹内成明さんであった。山本明さんは当時病気療養中であり、新学部構想については、参加できる状態ではなかった。渡辺武達さんは89年にはコミュニケーション論を嘱託講師として担当していたが、1990年から病気を得て退職した岡満男さんの後任教員として参加することになった。渡辺さんの新任人件以降、すべての人件は公募制に移行することになった。

私の手元に当時の新聞学専攻会議の資料がある。1989年4月19日付けで北村日出夫さんによって提案された新学部構想案である。同時に竹内成明さんが新学部構想についての（概念的）図式を描いている。北村さんのシナリオは新聞学専攻と社会学専攻とを組み合わせた、仮称であるが「情報・社会学科」を構成し、そのもとに情報学専攻と社会学専攻をおくという形をとっていた。その二つの専攻の上に共通の大学院を置く。各専攻は、独自に専門科目をおくが、互いに関連する共通科目をおくというものだった。この案は二つの専攻の垣根がかなり低くならないと実現できそうになかった。1992年には新聞学スタッフに浅野健一さんが共同通信社から教授として、佐藤卓己さんが東京大学社会情報研究所助手から助教授として参加する。

9. 大学院後期課程（博士課程）の発足

この時期の新学部構想はまた結実することはなかった。北村さんの構想の中で社会学

との連携という図式はかなり具体的な像を結んでいたようだ。社会学専攻が博士課程（前期，後期）をつくったとき、北村さんは後期課程のスタッフとして参加した。新聞学専攻としては、大学院修士課程は文学研究科では社会福祉学に次いで1964年に発足していたのだが、後期課程の設置では、社会学専攻に後れをとることになった。1998年4月に博士（後期）課程の設置することになった。この設置案の作成にあたって最も力を尽くしたのは佐藤卓己さんであったことは記録しておかなければならない。大学院は三つの領域から構成されており、1. メディア領域は、浅野健一と佐藤卓己が担当、2. 情報領域は山口、3. コミュニケーション領域は竹内成明と渡辺武達を担当することになった。後期課程の学生定員は3名と3つの領域に一人という最小最の構成をとった。現在、社会学部メディア学科の准教授である河崎吉紀さんは、この博士学位の取得者である。

2002年度の後期から再度の文学部改組転換委員会が発足した。私の日誌によると、2002年10月9日水曜日から改組転換本委員会が本格的に活動を開始している。12月に入ると、毎週のように会合がもたれ、2003年になると、小委員会、改組委員会とが開催され、委員の間では声を荒げるほどの議論が続いた。今となってみると、懐かしさを覚えるほど熱心に討議した。

このような流れの中で、文学部社会学科新聞学専攻は社会学部成立に先んじて、2004年3月に新聞学専攻をいう名前を閉じた。2004年4月から社会学科メディア学専攻と改名し、2005年3月までの1年間だけのことだが、文学部社会学科メディア学専攻が存在することになった。新聞学専攻では新聞学という名称が必ずしも専攻の内容と性格をあらわしていない。社会学部成立に向けて、議論は煮詰まっているが、これまでの例では、必ず新学部が成立するという保障はない。新学部案が流れれば、メディア学という名称も遅れることになるという議論があり、方針通りにメディア学専攻を発足することにした。

しかし、2005年4月に社会学部が成立し、メディア学専攻はメディア学科となって、現在に至っている。この間にスタッフも柴内康文さんが1999年に専任講師として、竹内長武さんが2001年に、佐伯順子さんが2002年に教授として、河崎吉紀さんが専任講師として、青木貞茂さんが2005年に教授として、勝野宏史さんが2010年にスタッフの一員となった。そして、2012年3月で准教授となっていた柴内さんが東京経済大学教授として転出し、私、山口功二がメディア学科を去ることになった。

メディア学科は、デジタル世代に入り、新しい時代を迎えているが、これら頼もしい陣容がメディア学科の未来を築く原動力として期待されている。



1963年度同志社大学文学部社会学科卒業生記念撮影